

流郷さんより過分なご紹介をいただきまして、世界的なオーソリティーなどと言われるとちょっと違うのではないかと思います。少しお時間をいただいて『古事記』についてお話していければと思います。

皆さん『古事記』ってどんな本かご存知でいらっしゃいますか？皆さん、お読みになったことがないかと思いますが、『古事記』とは多分日本が世界に誇っている書物ではないかと私は思っております。現存する日本最古の書物でございます。

成立は和銅5年、西暦712年で今から約1,300年とちょっと前ということになります。ちょうど奈良遷都直後です。奈良遷都って何年かご存知ですか？「納豆ねばねば平城京」とか覚えませんでしたか？710年ですが、奈良遷都して間もなく選定されて元明天皇という女帝に献上されたのが古事記でございます。太安万侶(オオノ・ヤスマロ)という人が書いたということがわかっております。内容は全3巻です。

上巻は神々の世界について書かれてあります。中巻は第1代神武天皇から第15代応神天皇までのことが書かれてあります。下巻は第16代仁徳天皇から第33代推古天皇—この方も女性ですが—までが書かれてあります。内容としては神話、伝説、歴史そういったものに歌謡がまざっています。歌です。先ほど音楽家の方がお話されていましたが、そういったものは古代から日本にもございました。今から1,300年くらい前の日本人の、日本人の考え方などを読み取ることができる本だと私は思っております、実はとても面白いです。社会人講座などで古事記をいたしますと、なんでこんなに面白いのを学校で教えないのですかねという意見もいただくんですが、本日全部お話することは到底できません。

『古事記』が上・中・下巻で3巻の本ですが、内容もそれほど長くはないですが、実はとても盛りだくさんな面白い本です。その中からエピソードを2つだけ選んで、皆さんももしかしたら聞いたことがあるかも…というお話を選んで、読み直してみるとちょっと違う解釈もあるかなというようなことからお話していけたらと思います。

ひとつは『古事記』上巻の中から、神話で「因幡の白兔」のお話です。「因幡の白兔」のお話で主人公は後に大国主神(オオクニヌシノカミ)といわれる神様です。このときはまだ大国主神になっていないです。大国の主というのは大きな国の支配者という意味ですが、まだなっていない。まだ彼は若いです。大国主神といわれるまでは大己貴神(オオナムチノカミ)と呼ばれていましたが、大己貴神にはお兄様達が沢山いて、ヤソガミなどといいます。ヤソガミというのは「八十神」と書きます。八十人も兄弟がいたのか。お母さん、大変だなと思われるかもしれませんが、当時は力のある男の人は何人も奥様を持つことができましたので、もしかしたら八十人くらい…それはちょっと無理かもしれませんが、「八」というのは日本の古代では「沢山」という意味を表しますので、沢山のご兄弟がおいでになったということになります。

その八十神(ヤソガミ)様達がいらっしゃるのはいづれの国です。出雲の国といえますのは今の島根県のあたりになります。出雲から鳥取の因幡の八上比売(ヤカミヒメ)という美しい女性を娶りに行きます。八十人も神様がひとりの女性のところに行く。それでどうするのかと言うと、選んでもらう。八十人もどんな様をいただくわけにいきませんから八上比売のところに行って「妻問い」をする。その時に大己貴神(オオナムチノカミ)には、おまえは袋を背負ってあとからついてこい、ということで大己貴神だけは袋を背負わされて重い袋をヨロヨロと背負いながらあとからついてきた、というお話になっています。

海岸をずっと歩いていきますと、赤裸の兔が倒れている。《皮を剥がれて赤裸》という歌があったような気がしますが、赤裸の兔が倒れている。そうすると最初に到着するのは荷物を持っていない八十神

達です。八十神は兎を見て「どうしたんだ？」と。兎がかくかくしかじかと身の上話をすると、それならおまえは「このうしほをあみ、かせのふくにあたりて、たかやまのをのへにふせれ」と言う。どういうことかといえますと、海の水を浴びてそして風の吹くのにかかせて高い山の上において風にあたっていなさいよ、したら治るから、と言うのです。

皆さんちょっと手に怪我をしてそこに塩水がついたら痛いですよ。体中皮を剥がれて海の水についたらどういうことになるかと考えると想像がつくと思いますが、でも素直な兎は言われた通りにして高山の上に風に吹かれていたら、体中の皮がもっとひどい状態になってしまってシクシク泣いていたところに、大己貴神(オオナムチノカミ)が通りかかります。大己貴神は、「兎、兎、どうしたんだ」と聞くと兎は実はかくかく、しかじかと。

そのかくかくしかじかの内容はこのとき実は「古事記」の中では語られます。それはどういうことかといえますと、兎は隠岐島にいて本土側に渡ってきたかった。だけれども兎は泳げないので渡る手立てがない。そこで海にいる鮫に、これは「ワニ」と古事記には出てきますが、ワニ鮫などといいますが、ワニというのは出雲の方言で鮫のことを指すと言われていました。ですから鮫(=Shark)のことだと思います。それで「ワニよワニよ、お前達の仲間も多いだろうけれども私達兎の仲間もすごく数が多いんだよ。どっちが多いか比べてみないか」と言うので、兎も素直で、「わかった、それじゃ数を数えてみたい」と言うので、兎が「じゃこの島から本土まで、あなた達は鮫を全部を呼び集めて橋のようにつながってください。私はあなたの方の背の上をびよんびよん跳びながら数を数えます。私は兎族の数はわかっているから。それで数の比較ができますよ」と言う。そうすると本当に鮫は素直に並んで待っている。そうすると兎はひとつ、ふたつと数えながらびよんびよん自然とできた鮫の橋を渡って本土に渡ってくる。まんまとやった！と最後の鮫から本土にびよんと跳び移るときに「俺はお前達をだましたんだよ、ヤーイ」と言ってびよんと跳び移ろうとする。そうすると最後の鮫が「なんだ！」と兎を捕まえて皮を剥いだというお話です。

「体中の皮が痛いんです。そうしたところにお兄様達がいらっしゃったのでどうしたらいいでしょうかと聞いたら、海の水を浴びて高い山の上で風に当たっていなさいよと言われたので、その通りにいたしましたら、もっと体中の皮がひどいことになり、裂けて体中が痛むのでございます」と大己貴神(オオナムチノカミ)に訴える。そうしたら「それはね、川の河口に行きなさい。川の河口に行って真水で体を洗って、その後で蒲(ガマ)の穂綿を」—ホワタと歌では言いますが、実は蒲の穂綿ではないんです。「古事記」の原文を見ますとホウオウと出てくる。これは蒲という漢字の下に黄色いという漢字を書きます。「蒲」というのはくさかんむりに浦という字ですが、蒲という下に黄色いという字をあてて「ホウオウ」と読みます。音読みだと「ホウオウ」と読みますが、日本語読みですと「蒲の花」と読みます。これは何を指しているかという蒲の表面についている黄色い花粉のことを指します。これは実は漢方薬です。今でも使われている漢方薬で、正倉院文書(ショウソウインモンジョ)にも出てくる。その正倉院にも使われている漢方薬です。そういうものを「敷き散らしてその上をゴロゴロ転がればあなたの皮は元通りになりますよ」と大己貴神(オオナムチ)が教えました。

その通りにしたところ、兎は元の白兎になりました。皮は治って毛皮はきれいな元通りになりましたというお話です。その時に兎が言ったのは、「兄神様達、八十神様達は八上比売(ヤカミヒメ)のところプロポーズに行っても八上比売とは結婚できないですよ。貴方様こそが八上比売に選ばれる方ですよ」と兎が予言するというお話です。

そうすると本当にその通りになって、皆んなで一緒に行くと八上比売はお兄様達の八十神に「私はあなたの方の妻にはなりません。私は大己貴神の妻になりたいと思います」と言います。その後のお話はまた続いていきますが、このお話をご存知の方は意地悪なお兄さんと善良な弟のお話と多分理解していらっしやると思います。本当にそういうふうにはずっと語られてきているお話ですが、実は「古事記」の本を素直に読むとそんなふうには書いていない。お兄さん達は意地悪で兎に海の水につかって風に当た

れと言ったとは書いていない。ただそう言っただけなんです。だけど、意地悪なお兄さんと善良な弟のように書かれています。

文章のままに読むと私はそうではないと解釈しています。多分そのほうが正しいと思います。つまりこれは医療の知識があるかないか問われているひとつの試練なんですね。で、お姫様と結婚できるかどうかというひとつの試練をクリアするためには、ある知識が問われる。そのために兎がいる。そして兎に対する正しい医療の知識があってこそお姫様と結婚することができる。だから兎が予言する。お兄様達はお姫様と結婚できない。でも貴方様こそが結婚できますよと。そういう知識を問われるひとつの試験だったと考えられます。どこにも兄達は意地悪で、悪賢い考えを持ってとは書いていない。そういうものが『古事記』にあるというのがとても面白いと思います。そして最終的に選ぶのは八上比売(ヤカミヒメ)で、八上比売は大己貴神(オオナムチノカミ)を選んだというお話になっています。こういう読み方をしますと、また違う解釈もできます。

ふたつ目のお話を話したいと思います。ふたつ目のお話は『古事記』・中巻からひとつピックアップいたしました。これは第12代景行天皇(ケイコウテンノウ)の条に出てくるお話ですが、景行天皇の息子には何人か有名な息子がおりますけれども、その中の一番有名な天皇の皇子は日本武尊(ヤマトタケル)という方だと思います。日本武尊伝説は多分ご存知の方も多くいらっしゃると思います。「因幡の白兎」ほど有名ではないけど多少はご存知だと思います。日本武尊と弟橘媛(オトタチバナヒメ)の伝説をご存知の方はどれくらいいらっしゃいますか？日本武尊は『古事記』の中で語られる日本武尊と『日本書紀』の中で語られる日本武尊は大変違います。『古事記』の日本武尊は実は父親に疎まれて、でも父親の愛を求める孤独な少年として描かれているんです。それには原因があるのですが、あまり細かくお話する時間が本日ございませんのでざっくりとお話しますと、日本武尊はまず最初に父・景行天皇から「おまえは九州の方に行って、九州の熊襲(クマソ)一族を征伐してこい」と言われる。九州の果てに行きまして、日本武尊は女装などして—そしてこれは面白い話ですが、女装ができたということはどういうことかと思われませんか？皆さん。これは今日、話す予定ではなかったのですが。(某会員)美少年？—美少年だった。そう。そして女装ができたということは第二次性徴がまだきていないということだった。髭が生えていなかった。当時は今のような優れもののシェーバーがなかった。ですから男の人が成長するということが髭が生えてくるということなんです。でも髭が生えたら女装できない。ですから日本武尊が女装できたということはまだ第二次性徴がこない、本当にうら若い少年だったということが実はそこから読み取れますが、それはちょっと置いておきまして、そこでまんまと熊襲建(クマソタケル)を退治した。そんなヒナヒナした少年なのに物凄い力を持っている。それで熊襲建を殺して戻ってくる。父親に「やってまいりました」と報告すると父天皇は日本武尊を疎んじているものですから、「じゃ今度は西の方が済んだら東の方へ行ってこい」と言われる。日本武尊は泣いて、それでも当時は天皇の威力は絶対なので、いくら父親でもイヤだとは言えません。それで日本武尊は「わかりました」と言って出発するわけですが、その出発していく前に伊勢神宮に立ち寄った。そこには叔母様の倭姫(ヤマトヒメ)という方が伊勢の斎宮として天照大神を祀っていらっしゃいます。そこにご挨拶して行く。父親の前では決して言えなかった弱音が叔母様の前に行くときに出るんです。叔母様に挨拶するとき「父は自分なんか死んでしまえばいいと思っていらっしゃるんです」と訴える。「西の方に行ってまだそれほどの時も経っていないのに、今度は東の方のもっと恐ろしい人々のいるところに私を軍勢もつけてくだされずに遣られる。これを思えば私など死ねばいいと父に思われているのです」と言ってさめざめと泣くのです。

その時に叔母様は「ちょっと待ちなさい」と言って伊勢の神宮に祀られていた天皇家の宝を日本武尊に渡す。これは草那芸之大刀(クサナギノタチ)というものです。草那芸之大刀(クサナギノタチ)というものは、更にもっと昔の神話時代に須佐之男命(スサノオノミコト)という人が八岐大蛇(ヤマタノオロチ)を退治したときにヤマタノオロチの尻尾から出てきた鉄の剣です。それを須佐之男命は天照大神

に献上いたします。そうすると天照大神は、今度は自分の孫にあたる邇邇芸命(ニニギノミコト)を地上に下すときにそれを持たせる。その他に玉と鏡も持たせた。これが「三種の神宝」といわれるものですが、草那芸之大刀(クサナギノタチ)を持たせる。それが伊勢の神宮に祀ってあるんです。それを日本武尊にご自分の一存で渡す。

そういうことができたということは当時の伊勢の斎宮には強大な力があつたということが考えられると思います。その他にもうひとつ、「これは緊急のときにこの袋を開けるんですよ」と小さな袋をくださるんです。その袋の中には実は火打石が入っている。後ほど大変役に立つんですが、それについては置いときます。

草那芸之大刀(クサナギノタチ)とその袋をもらって日本武尊は出かけていきます。そして東の方にどんどん進んで行く。当時のルートは東海道は、実は観音崎のもうちょっと北の辺りから浦賀水道を渡って千葉県側、房総半島に渡るというルートです。陸路よりそちらのほうが楽だったと考えられます。けれども海はなかなか厳しく、今でも浦賀水道は潮の流れが早いと聞いておりますが、当時は水が走るといって「走水(ハシリミズ)」という名前がついていましたし、今でも観音崎辺りには「走水」という地名がございます。走水神社というものもあります。

その海をいよいよ渡るようになったとき、その海の途中で神様が立ち現れる。だいたい日本の神話では荒ぶる神というのは境目に現れる。それは海峡だったり川だったり峠だったりするんですが、ここでは海峡－浦賀水道で現れます。そして神が現れて祟りをする。その船をぐるぐる巡らせて、船が前に進めなくなる。そうすると一行は大変困る。遭難しそうになる。そのときにそれまで登場していなかった日本武尊の妻がいきなり『古事記』の中に登場してくる。これが弟橘媛(オトタチバナヒメ)という女性ですが、何とおっしゃるかといいますと、「あれ みこにかはりて うみのなかにいらむ」と。私は貴方様に代わって、私が海の中に入ります。だから貴方様はどうかお仕事を成し遂げてそして国にお帰りくださいませと言って、船の中にあつた敷物をみんな波間に浮かべてその上に弟橘媛は飛び降りるのです。荒れ狂う海の中に。そしてその中で沈んでいきながら弟橘媛は歌を歌うんです。「さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中(ほなか)に立ちて問ひし君はも」という歌で、これは「あの相模の野原で火に取り囲まれたときにあなたは私のことを心配してくれて声を掛けてくださいましたね」という歌で、今まさに波間に沈んでいこうとする弟橘媛(オトタチバナヒメ)が胸に思い浮かべたのは自分の安否を心配してくれる日本武尊(ヤマトタケル)の姿だったわけです。

そして弟橘媛(オトタチバナヒメ)が海に沈むと船は、ずっと前に進めるようになる。荒れ狂う波も風もやんで、船が前に進めたという話です。そして船は房総半島側に渡り、そこで一行は七日間待ちますけれども、結局、弟橘媛の遺体はあがらず、弟橘媛の櫛だけが岸边に流れ寄ってくる。そしてその櫛をお墓に納めて更に先に進んでいったというお話があります。

やがて東の方も征伐して帰ってきた日本武尊(ヤマトタケル)は帰り道、足柄の坂に立っていよいよ東の国に別れを告げるときに、「吾妻はや」(わが妻よ…)と言ったというエピソードが伝えられています。『古事記』の中です。「アズマ」とは「わが妻」という意味です。「ハヤ」というのは「ああ」、という意味で「わが妻は、ああ」と言ってその国に別れを告げる。ですからそれ以来、東の方を「アズマ」と呼ぶようになったと地名起源伝説にもなっているんです。

この話は皆さんどうお受け取りになりますか？美しい自己犠牲のお話と思われるでしょうか。女が船に乗ったらいけないんだと思われるでしょうか。実は古代には、女はこれをやってはいけないということは、ほとんどないんです。ですから今はお酒を醸す杜氏(トウジ)というのは男の人で、女はお酒を作る、醸すところに入るといけないと言われておりますが、古代は酒を醸すのはむしろ女性の仕事でした。女性の主婦のことを「刀自(トジ)」とか「大刀自(オオトジ)」とか言いますけれども、それは「杜氏」の言葉の元になったと言われております。

ですから船に乗っていけないはずはないんです。ここで私が一番注目したい言葉は「あれ みこにかはりて うみのなかにいらむ」というその言葉です。私は貴方様に代わって、と言っています。ということはどういうことかといいますと、私は貴方に代わって海の中に入るといことは、海の神に求められている身柄というのは本来は日本武尊(ヤマトタケル)なんです。つまり一行のリーダーである日本武尊(ヤマトタケル)が本当は海の中に入って神に挨拶しなければならない。けれどもそれは無理です。日本武尊(ヤマトタケル)は天皇から命じられた使命があるので、死ぬわけにはいかない。そこで弟橘媛(オトタチバナヒメ)が海の中に入る。それはどういうことを意味しているかという、女だから、妻だからというようなことよりも日本武尊(ヤマトタケル)と弟橘媛(オトタチバナヒメ)の価値というものがほぼ等価であるという意味です。ですから船頭とか、かこ(人夫)とか従者ではだめなんです。海の神に捧げられる身柄としては日本武尊(ヤマトタケル)に代われる者は弟橘媛(オトタチバナヒメ)しかないということがそこに表れている。

ですから古代は女性の力は…こんな話を学生にするとそんな古い時代は物凄い男尊女卑だとばかり思っていたという学生がほとんどですが、日本の古代は決してそんなことはなくて、女性の価値が非常に高かった時代だろうと思っています。今、男系とか女系とかいろいろ言われています。婦系とか母系とかと言われているそういうときですが、特に皇室典範の話がこの間ニュースで出ていましたけれども、私は日本の古代というのはソウケイだったと思います。ソウとは双子という字。というのは「ヒコ・ヒメ制」とか「ヒメ・ヒコ制」というのがあって、女性と男性がペアになって治める支配体制というのが日本の古代にはありました。そういったものの流れを引いて、弟橘媛(オトタチバナヒメ)と日本武尊(ヤマトタケル)の話は出来上がっているのではないかと思います。

ですから女性の地位は決して低いものではなかったと思います。大体、皇室の祖先神である天照大神が女神様であったということもやっぱりお考えいただきたいと思ひますし、そういうお互い認め合って、お互いの価値を決して同じものではないけれども、同じだけの価値があるということを認め合っていたのが日本の古代ではなかったのかなと思います。そういえば先ほど読みました大己貴神(オオナムチノカミ)と「因幡の白兎」の話でも結婚の決定権は八上比売(ヤカミヒメ)のほうにあって、八十神(ヤソガミ)のほうにはなかった。八十神は八上比売(ヤカミヒメ)に私は誰と結婚しますと言われて引き下がるしかありませんでした。だから女性が強いというつもりはないんです。けれども男性も女性もお互いにそれぞれの力を認め合っていた時代というものが日本の古代にはあった。それは『古事記』から読み取ることができるのではないかと。

そういうことでこの二つのエピソードを取り上げてみました。本当はまだいろいろお話ししたいことがあるのですが、もう時間がまいりましたので、これで終わりにいたします。ご清聴ありがとうございました。